

作成日	2025 年 6月23日
学科名	史学科

自己評価：□・A・B・C

<p>評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み</p> <p>(ア) 質保証の客観性・有効性を高めることを目的として、令和6年度に全学科で実施を依頼した、学生が参画したFDについて、そこで得られた成果・課題について記載してください。</p> <p>(イ) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。</p>
<p>参照資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 過年度のFD実施報告書 ・ 令和6年度点検・評価シート ・ 令和6年度内部質保証推進会議からの提言 ・ 卒業時アンケート（大学） ・ ジェネリックスキル測定テスト ・ 資格取得や進路就職状況 ・ 各種会議の議事録等 ・ その他参照した資料（史学科会議議事録、学位プログラムレベル（学科）FD実施計画・報告書）

【現状分析】

- (ア) 史学科の学生参画FD(1月15日12:15~13:30。教員は6名、学生は7名参加)では、日本史・東洋史・西洋史の3コースから満遍なく教員・学生を抽出し、講義のありかたやその内容だけでなく、時間割や教室の設備などについても議論した(根拠資料:学位プログラムレベル(学科)FD実施計画・報告書)。学生からの要望のうち、史学科専門科目については、同一名称の特殊講義でも担当講師が変わった場合は再受講(および単位取得)可能など、より多様な講義を受講できるようにしてほしいとの声が最も大きかった。ただし、もっとも改善の希望が強かったのは、教職課程や図書館司書課程のような資格系の科目が特定の学年の特定の時期に固まりすぎであることやそうした授業が6限目に集中しており、冬期は授業後の帰宅が遅くなり、治安上不安を感じることに、オンデマンド授業でも同じ時間に配置されていて受講できないということであった。いずれも教員には気づきにくい点であり、学生参画は有意義な試みであったと分析できる。
- (イ) 2024年度の自己点検・評価では、史学科学生のコンピテンシーの相対的低さが課題として挙げられていた。この点については学科会議において頻繁に話題とし(根拠資料:2024年度、2025年度学科会議議事録)、全教員の意識が向きやすくなるように工夫している。それと同時に、カリキュラムの中核に位置する1~4回生の演習系科目において、以下の【成果】で述べている通り、1回生~4回生の演習系授業で学生一人当たりの報告時間を増やすなど、コンピテンシーを高める工夫にさまざまな形で取り組んでいる(根拠資料:2024年度、2025年度学科会議議事録)。

【成果】

学生参画FDでの学生からの要望について、史学科専門科目に関しては、教員から今後の改

善の可・不可について具体的な説明ができ、学生側の不満もある程度解消されたと思われる（根拠資料：学位プログラムレベル（学科）FD 実施計画・報告書）。

コンピテンシーについては、1 回生の基礎演習 A では学生一人当たりの報告時間を増やすことで、聴き手からの質問の時間も確保し、学生が自己の意見を述べやすい環境となっている。具体的には、学生発表回を 7 回から 8 回に増やし、1 回の授業での報告学生数を 5、6 人から 4、5 人に減らした（根拠資料：2024 年度版、2025 年度版史学基礎演習 A 受講手引）。日本史・東洋史・西洋史の各コースに分かれる、2 回生以降の演習においても、特定のゼミの学生数が突出して発表の機会が減ることのないよう、学生へのアナウンスによって各ゼミの人数が均等になるように努め（1 教員は 1 ゼミ担当が原則であるが、人数によっては 2 ゼミとしている。）、学生が自己の研究について意見を述べる機会が増すよう工夫している（根拠資料：2024 年度、2025 年度学科会議議事録）。また、上述の学生参画 FD も、学生がコンピテンシーを高める良い機会となったであろう。4 回生のジェネリックスキル測定テストの結果でも、「3 年次受験に比べて、コンピテンシー総合は伸長が見られる」となっており、一定の成果が出つつあると考えられる。

【課題】

学生参画 FD については、史学科専門科目ではない科目、とくに資格系の科目に関して、教員側は改善を確約できないため、学生側の不満は解消されず、むしろフラストレーションがたまるのではないかという懸念がある。またコンピテンシーに分類される能力のうちどの要素を重視し、涵養していくのかについては、特に DP との関わりの中で、学科において議論し、コンセンサスを形成していく必要がある。

【改善・発展方策】

学生参画 FD で出た学生側の要望のうち、【現状分析】(ア)で述べた、資格系科目の時間割については、学科が時間割策定に直接関与しているわけではなく、対応しきれない。今後も学生参画 FD でこの種の要望が出てくることは大いに考えられる。そこで、こうした要望をどのようにして関係部局へ届けていくのか、その方法を学科会議等において諸委員に諮り、検討していく。

学生のコンピテンシーのうちどの要素を重視・涵養するのか、学科会議において議論し、教員間での見解を一致させて、学生指導に活用する。

自己評価：S・A・B・C

評価項目② カリキュラムの適切性と成果

- (ア) DP、CP に基づき、体系的な履修を促すカリキュラムとなっているか、記述してください。
- (イ) カリキュラムにおける常勤、非常勤の担当教員のバランスは適正か、記述してください。
- (ウ) DP の達成につながる学修成果を得られているか、ジェネリックスキル測定テストや卒業時アンケート結果等を分析・活用して、検証してください。

参照資料

- ・カリキュラムマップ、ツリー
- ・単位修得要領
- ・シラバス

- ・科目群別非常勤教員比率
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・その他参照した資料（大学 HP、『大学入学案内 2026』、2025 年度第 3 回学部長・学科長連絡調整会議資料）

【現状分析】

(ア) 文学部史学科では、DP、CP に基づき、日本史学、東洋史学、西洋史学の分野において、学生が歴史学の知識・理解等に拠りつつ、広い視野と根拠に基づいて判断する力を身につけ、歴史学の専門的知識・理解・技能等を活用して、社会に貢献できるよう、以下述べるような、講義・演習科目から成る教育課程を編成・実施しており、体系的な履修を促すカリキュラムとなっている。

専門科目は 1 年次から順次積み上げていく形であり、1 年次には歴史学に関する基礎的な内容の導入科目である日本史・東洋史・西洋史の各概論（必修）と、少人数でプレゼンテーションや質疑応答・ディスカッションを行い、レジュメやレポート作成等のアカデミックスキルを身につける演習科目である史学基礎演習（必修）を配置している。2 年次から日本史、東洋史、西洋史の各コースに分かれ、歴史学のそれぞれの分野の学びを深めるための日本史・東洋史・西洋史の各特殊講義と、主体的に調査し考える力の素地を身につけるための日本史・東洋史・西洋史の各入門演習（必修）及び各講読（必修）を配置している。3 年次には歴史学の学びをさらに深めるための発展的講義や講読科目として、引き続き特殊講義・講読を配置するのに加え、さらに分野を 1 つに絞ってゼミを選択し、主体的に調査し、批判的・合理的に考える力を養うとともに、課題発見力や課題解決力を身につけ、表現能力・対話能力も高めるための日本史・東洋史・西洋史各演習Ⅰ（必修）を配置している。4 年次には、それまでの教育・学習の総括として日本史・東洋史・西洋史各演習Ⅱ（必修）、卒業論文の執筆（必修）を配置している。

(イ) 史学科では、常勤教員に日本・東洋・西洋の各地域、古代～現代までの各時代の専門家を揃え、学生の問題関心に応じた、さまざまな歴史を学べることを学科の特徴としており、『京都女子大学大学案内 2026』や大学 HP でも積極的に広報している。この常勤教員全員で、2024 年度史学科専門科目のカリキュラムにおいて、専門科目のうち特に重要な 1 年次配当の必修科目（史学基礎演習、日本史・東洋史・西洋史概論）と 2 年次以降の演習科目（日本史・東洋史・西洋史の各入門演習・演習Ⅰ・演習Ⅱ）を担当している。特殊講義・講読、およびそれらに準ずる内容である文学部共通専門科目についても、常勤教員が最低 1 つ（大半は 2 つ）担当しており、卒業論文執筆までにいたるすべての種類の学びに常勤教員が関わっている（根拠資料：大学 HP シラバス）。一方、史学科カリキュラムの中で非常勤教員は、常勤教員とともに、特殊講義・講読、およびそれらに準ずる内容である文学部共通専門科目等を担当しているが、これは(ア)で述べた通り、史学科のカリキュラムの特徴が、「学生が日本史・東洋史・西洋史の各分野において広い視野と根拠に基づいて判断できるようになること」にあるからである。学生は、常勤教員とは異なる研究テーマや時代、地域、史料を専門とする非常勤教員の特殊講義や講読を受講することで、より幅広い視野と根拠を得て自身の研究をブラッシュアップし、卒業論文をより高度な内容に仕上げることが可能となっている。以上から、カリキュラムにおける常勤教員と非常勤教員との役割分担のバランスは適正といえる。

「科目群別非常勤教員比率」によれば、現在の非常勤教員率は34パーセントと他学科に比べて若干高めであるが、各年度の「単位修得要領」に拠って内訳を見ると、これは上述の特殊講義や講読ではなく、史学科が担当している諸資格、すなわち中学校社会科教員免許、高校社会科地歴教員免許、博物館学芸員資格のために開講している科目の割合が高いことに起因する。どの資格に関しても、近年の文科省の改革により、取得にあたって必要な科目が増加し、とりわけ教員免許では、教育内容だけではなく、地歴科教育法などの教育方法系の授業を史学科専門科目に組み込まなければならなくなった。他にも、教員免許関係では人文地理学概論や自然地理学といった地理関連の科目や法律学研究、経済学研究など、博物館学芸員資格については日本美術史といった美術史系の科目など、史学科には専門教員がいない分野が多く、資格を認定するためには非常勤教員に頼らざるをえない。一方で、評価項目①の現状分析(ア)でも述べた通り、学生からは、そうした資格とは関係のない史学科専門科目について、より多様な種類の講義を望む声が大きく、資格系科目とそれ以外とのバランスを考えていく必要がある。

なお、常勤教員の担当科目数については、「R6 学長原則にもとづくクラス数と専任教員担当クラス数の差異」がプラス15と、他学科を大きく上回っている(根拠資料:2025年度第3回学部長・学科長連絡調整会議資料2-0「科目数の適正化の必要性と進め方について20250619部局長会」、表2「学長原則と専任教員担当クラス数の差」(2024年度/学部)。他学科は、データサイエンス学科がプラス2である以外、全てマイナス)。大学院科目を含めると、常勤教員の担当クラス数はさらに増加するため、これ以上の担当科目増は現実的ではない。

(ウ) 卒業時アンケートにおいては、「大学の専門科目で学んだ知識・技能」が3.41と全項目のうち最も高い数値を示している。次いで高い値を示している項目は「目標に向けて協力的に仕事を進める能力」(3.38)、「社会のルールや人の約束を守る力」(3.37)であり、また、これらほどではないが「倫理観と市民として社会的責務への自覚を持っている」は3.24、「課題発見・課題解決に必要な情報を見定め、適切な手段を用いて収集調査・整理する能力」は3.17と、他項目よりも高い数値である。これらDPに合致する項目が高数値の上位層を占めていることから考えると、カリキュラムはDPの達成につながる学修成果を得られるものとなっているといえる。

【成果】

上記(ウ)で述べたような高い数値を得られていることが成果のひとつである。さらに、「学習行動調査可視化(学部生)」の「身に付いた力/経験」の史学科全回生総合では、「科目に関する知識・理解」が1位、2位が「文献・資料を分析する力」、3位が「異なる文化に関する知識・理解」と、DP、CPに合致している3項目がトップ3である点も強調に値する。とりわけ、2位の「文献・資料を分析する力」が3回生では1位となり、4回生では2位との差を広げていき、全回生総合で4位の「人に分かりやすく話す力」も同様に回生が上がるにしたがって順位を上げていく点は、大きな成果である。

【課題】

卒業時アンケートの「満足度」調査のうちカリキュラムに関連する項目である「自分を成

長ささせてくれる教授、先生との出会い」(4.28)、「教授、先生の授業への取り組みに対する熱心さ」(4.30)、「少人数・ゼミ形式授業の内容・数」(4.44)、「専門的な知識が身につく授業の多さ」(4.32)などが全学平均より高いのに比べ、「カリキュラム選択の幅が広い」は3.89とやや低く、全学平均3.94よりも低い。現代社会における価値観の多様化、インターネット検索やSNSの発達により、学生の問題関心もさまざまとなっており、それに応えられるようにカリキュラム選択の幅をより充実させていく必要がある。そのひとつとしては、評価項目④でも述べている副専攻プログラムの充実が挙げられる。

【改善・発展方策】

講読や特殊講義において、より幅の広い選択ができるようなカリキュラム改訂策を講じる。その際、評価項目①でも挙げた学生参画FDをさらに充実させ、常勤教員のさらなる負担増や資格系科目への非常勤教員の偏重を防ぎつつ、いかに学生の要望を取り入れていくかが肝要となろう。

自己評価：S・A・B・C

<p>評価項目③ 成績評価</p> <p>(ア)成績分布は、教員間で評価のバラつきが生じていないか。また、学科において検証・調整されているか記載してください。</p> <p>(イ)成績評価、フィードバック等がシラバスに基づき適切に実施されているか、学修行動調査やALCS学修行動比較調査等の結果(評価の公平性の学生満足度)から検証し、記載してください。</p>
<p>参照資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各科目の成績分布 ・学修行動調査の成績評価に関する設問 ・ALCS学修行動比較調査(1・3回生)の「69.評価のされ方」満足度結果 ・その他参照した資料(史学科会議議事録)

【現状分析】

- (ア)「各科目の成績分布」によれば、史学科専門科目では、教員間で評価のばらつきは生じていない。史学科では学期はじめに担当教員間で成績評価の方法について相談・確定するとともに、学期中にも適宜、バラつきがないように検証し、調整しているが、それだけでなく、日本史・東洋史・西洋史の各コース内においても、非常勤講師を含めて検証・調整を図っている(根拠資料:2024年度史学科会議議事録)。とりわけ、1回生の基礎演習A・Bでは担当教員全員で、各コースの入門演習やゼミ(演習I、II)においてはコース所属教員全員で、ルーブリックを作成し、その過程を教務委員が統括することで、評価のばらつきが生じない工夫を行った。
- (イ)成績評価、フィードバック等はシラバスに記載されており、それに基づいて適切に評価・認定されているが、実際、「学修行動調査可視化(学部生)」の、成績評価に関する設問「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」では、史学科では57.6パーセントが「適正に評価されている」と答えており、これは全学平均55.4パーセントよりも高い。また「科目によりばらつきがある」と答えた学生も、全学平均22パーセントに対し、史学科では17.5パーセントと明らかに低い。

【成果】

(ア)で述べたように1回生全員が受講する基礎演習や、2回生以降の各コースの入門演習やゼミ(演習I・II)についてはとりわけ入念に、教員間で評価のばらつきが生じないように調整しており(根拠資料:2024年度史学科会議議事録)、ALCS学修行動比較調査(1・3回生)の[69.評価のされ方]満足度結果では、史学科の1回生の数値は1.57(全学科1.33)、3回生のものは1.81(全学科1.57)で、いずれも全国はもとより、全学科平均をも上回っている。

【課題】

2025年度から成績評価基準が、GPによるもの(SS、S、A、B、C、D)となることに伴って、新たに教員間で評価にばらつきが生じることがないようにする必要がある。

【改善・発展方策】

上の【課題】欄で述べた、新たな評価基準への対応を、学科会議や各コース内会議で検討していく。